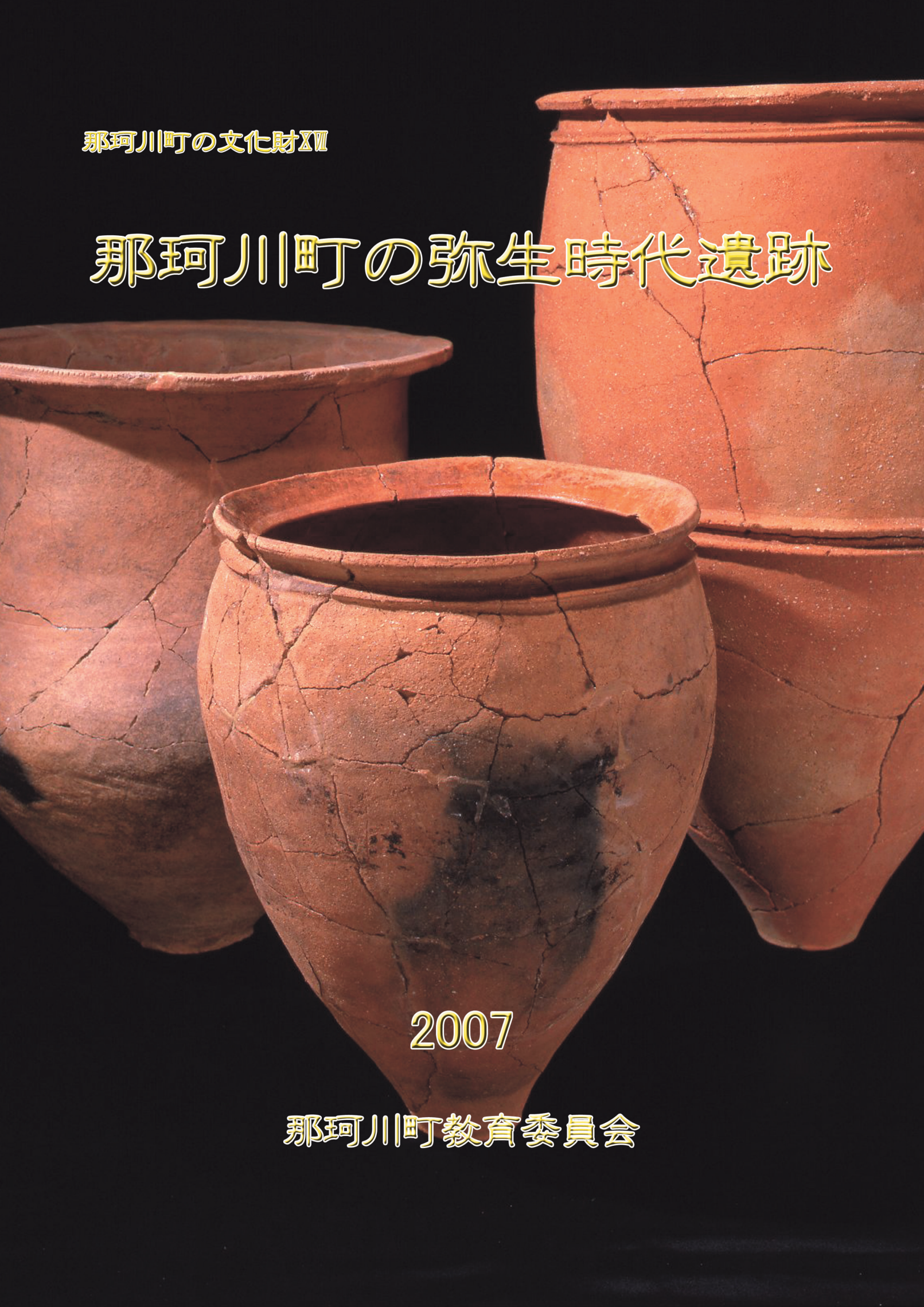




那珂川町の文化財ⅩⅦ

那珂川町の弥生時代遺跡

2007

那珂川町教育委員会

はじめに

今から約 2,500 年前、中国からはるばる海を渡り私たちが住む北部九州に米づくりが伝わりました。これが、弥生時代の幕開けです。それまで、移動しながら狩りをし、木の実を採集し、また、漁で暮らしていた人たちは、原野を切り開き、安定した食物を手に入れることができる米づくりを取り入れることで、同じ場所で暮らすようになりました。始めは小さかった村々も、やがて強い村が弱い村を吸収し、小さな国が生まれました。このころの様子を記した中国の書物には、「楽浪の海の彼方に倭人がある。百を超える国がある。季節を定めて中国の皇帝にあいさつに来る」とあります。また、奴国の王様が、中国の皇帝から金印をもらったのもこの時期です。その後、これらの国々は強い国が弱い国を吸収しながらまとまっていき、弥生時代の終りごろの邪馬台国の時代には 30 国ほどになり、やがて、日本の国としてまとまっていきます。

今回は、日本の国の過渡期である弥生時代的那珂川町を取り上げました。この冊子を通して、当時の那珂川町を知っていただき、太古に想いを馳せていただければ幸いです。

あんとくだい いせきぐん 安徳台遺跡群

那珂川町を代表する弥生時代の遺跡で、福岡平野の最も奥まった所に位置しています。遺跡の広さは約 10 万㎡で、これまでの発掘調査で、弥生時代、奈良時代、室町時代の遺跡が発見されています。このうち弥生時代の遺跡は、中期から後期初めにかけての集落と中期後半の墓地が見つかっています。集落は台地全体に広がり、これまで、130 軒をこえる住居が確認されました。なかでも 2 号住居は弥生時代の中期中ごろでは日本最大級の大きさで、青銅器の銕型や勾玉など貴重な遺物が出土しています。墓地は甕棺墓で、10 基を確認しています。このうち 2 号甕棺墓からは、たくさんの副葬品が出土し、奴国の有力首長のお墓であることが分かりました。



上空から見た安徳台遺跡群

台地の広さは裾野まで含めると 22 万 5 千㎡で、平野部との比高差は約 30m もあり、自然の要害ともいえる地形をしている。



2号住居

中期中ごろ(約 2,200 年前)の円形の住居。直径が 14m を超え、この時期の住居としては日本最大級。住居からは勾玉や青銅器の鋳型、鉄器や鉄片、石剣や石包丁の未製品、また、それらの加工や仕上げに使用されたと考えられる砥石や作業台が出土した。右の写真は遺跡見学会の様子。230 人以上の人が取り囲んでも、まだすき間が見られ、住居がいかに大きいかがわかる。



まがたま
勾玉(2号住居出土)
上質な滑石でつくられている。一度壊れたものに穴をあけ直し使用している。(長さ約 2.3cm)



せいどうき いがた
青銅器の鋳型(2号住居出土)
滑石製。やりがんな(のみ)の鋳型。住居に伴って出土した鋳型としては、日本最古級である。(幅約 4.8 cm)



くだたま
管玉(18号住居出土)
韓国でしか産出しないアマソナイト(天河石)でつくられて日本初。(長さ約 8mm)



どうぞく
銅鏃(18号住居出土)
青銅製の矢じり。住居からの出土は日本初。(残存長さ約 2.3cm)



有力首長墓

大きな墓こう(4×5m)のなかに6基の甕棺が埋められていた。(写真左) 一番深いところで見つかった2号甕棺(右)と5号甕棺(左)のうち、2号甕棺からは貝輪 43 個以上、ガラス製の勾玉3個、管玉 334 個、塞杆状製品2個、鉄戈1本、鉄剣1本が出土した。また、5号甕棺からも塞杆状製品が2個出土した。(写真右)



さいかんじょうせいひん まがたま くだたま
塞杆状製品・勾玉・管玉

塞杆状製品(左)は全国で2例目の出土で、髪飾りとして使われた。勾玉(右上)、管玉(右下)はガラス製で、組合せて、首飾りなどにして使われた。



かいわ
貝輪(腕輪)

ゴホウラ貝という沖縄など南西諸島の海でしかとれない巻き貝でできている。43個以上も出土したのは日本初。(長さ 13~15cm)



てっけん (左)とてっか(右)

お墓からよく出土しているため生前の権威や地位をあらわすものと考えられている。鉄剣の柄には糸が巻かれている。(長さ約 30cm)



あん とく はら だ い せき ぐん
安徳原田遺跡群

安徳台遺跡群の眼下に広がる遺跡群で、V字形に広がる平野部の一番奥まった部分に営いとなまれています。調査例が少なく遺跡の内容は良く分かっていませんが、弥生時代から中世にかけての遺跡が見つっています。このうち弥生時代のものとしては、中期の甕棺墓が1基と後期の溝が1条確認されているだけです。溝の中からは祭さい祀しに使われた赤く色を塗った筒形器台つつ がた き だいが出土しています。また、本遺跡からは銅矛どう ぼこが12本出土しており、今後の調査が期待されています。



昭和 62 年度調査区全景

現在のライスセンター建設前に行った発掘調査の様子。調査区上辺のほぼ中央から斜め左下にのびる大溝おお みぞが発見された。



おお みぞ
大溝

幅約3mの大溝の一番上で、土器がまとまって出土した。出土した土器から、祭祀まつり（まつり）を行った跡と思われる。（写真左）
 右の写真は筒形器台が出土した様子。



筒形器台（大溝出土）
 表面が赤く塗られている。
 （高さ約 60cm）



つぼ ばち
壺（左）と鉢（右）
 壺は筒形器台と同じ大溝から出土。鉢は 2 号溝から出土。（右：高さ約 22cm）

銅矛（右）
 明治 27 年に安徳の原田から出土した12本のうちの1本である。広形銅矛といわれるもので、祭器として使用された。長さ約 90cm
 （藤野徹成氏蔵）



観音堂遺跡群

観音堂遺跡群は、観音堂バス停から片縄バス停間の西側に広がる丘陵上に営まれた遺跡で、発掘調査の結果、縄文時代から平安時代までの遺跡が見つかっています。

このうち遺跡の中心になるのは、弥生時代の前期の終わりから後期にかけてのお墓で、木棺墓3基と甕棺墓92基、石蓋土壙墓1基が発見されています。墓地は区域や範囲に決まりがあったのか、南北方向に列をなしてつくられ、時期を見ると丘陵先端部に古いものが多く、奥に向かうに従って新しくなっています。また、74号甕棺墓から硬玉製の管玉、22号甕棺墓から中国製の銅鏃、そして80号甕棺墓からは貝輪（腕輪）が出土しています。貝輪は当時、特別な地位の人でなければ持つことが出来ない貴重な品物ですが、これを身に付けていたのは3歳くらいの幼児であったため、この時代から権力の世襲制が行われていたことを示唆する、日本で初めての発見となりました。



発掘調査の様子

左から82号甕棺墓、石蓋土壙墓、80号甕棺墓、79号甕棺墓、78号甕棺墓。このうち石蓋土壙墓からは刀子が、80号甕棺墓からは貝輪が出土した。



80号甕棺墓貝輪出土状況

貝輪の中と貝輪にたおれかかるとして腕の骨が残っていた。

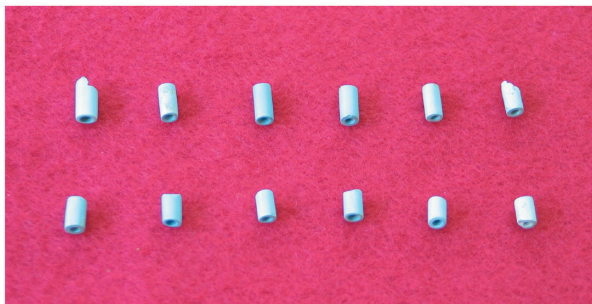


貝輪（腕輪）
80号甕棺墓から出土。安德台遺跡群出土の貝輪と同じく、アツソデ貝でできている。（長さ約6cm）



銅鏃（左）
青銅（すずと銅でできた合金）でつくられた矢じりの破片。中国からの輸入品。22号甕棺墓出土。（長さ約1.2cm）

石剣（右）
剣の先端だけの出土のため、死者に刺さっていたものかもわかりません。14号甕棺墓出土。（長さ約8cm）



管玉（左）
硬玉製で、つなげて首飾りなどにして使われた。74号甕棺墓出土。（長さ約4～7mm）

刀子（右）
鉄製の小刀。石蓋土壙墓から出土。（長さ約11cm）



いま みつ むね いし い せき ぐん 今光・宗石遺跡群

今光・宗石遺跡群は今光の安徳公園付近一帯に広がる遺跡群で、これまでの発掘調査で縄文時代から中世にかけての遺跡が重なりあった複合遺跡であることが確認されています。このうち弥生時代の遺跡としては、甕棺墓と住居・土壇・方形周溝が見つかっています。甕棺墓は全部で95基が調査されており、時期は中期から後期にかけてのもので、40号甕棺墓からは銅釧（腕輪）が4個出土しています。また、全国で初めて表面を黒く塗った甕棺が見つかり、注目を集めました。



40号甕棺墓出土状況

四角い墓こうの中に、二つの甕が口を合わせた状態で出土した。甕の中には人骨は残っていなかったが、銅釧が出土した。（甕の大きさは二つを合わせて約1.7m）



銅釧（腕輪）

青銅製の腕輪で、砕けた状態で出土した。本来の姿に復元するのは無理であったが、おおよそ写真の大きさの釧が4個あることがわかった。（径約7cm）



甕と高坏

食べ物などを蓄える甕（左）と食べ物などを盛る高坏（右）で、弥生時代の終わりごろつくられた。11号土壇から出土。（左：高さ約40cm）

まつのき い せき ぐん 松木遺跡群

梶原川を挟み、宗石遺跡群の対岸に広がる遺跡で、これまでの発掘調査で縄文時代から中世にかけての遺跡が発見されています。このうち弥生時代の遺跡は住居や貯蔵穴、甕棺墓、土壇墓、木棺墓などが確認されており、時期は前期から中期の初めごろのものが中心です。特にこの時期の甕棺墓は本遺跡で最も多く見つかっており、那珂川町の弥生時代の始まりを考えるうえで、貴重な遺跡といえます。



140街区15号貯蔵穴（上）

長さ約1.3m、深さ約1mと小形の貯蔵穴（食べ物などを保存する穴）だが、底から土器が出土している。

140街区6号甕棺墓（左）

前期の甕棺墓で、日常容器の壺に近い形をしている。（長さ約1m）



貯蔵穴から出土した土器

食べ物などを蓄える壺（左）・甕（右）と、蓋形土器（手前）。（左奥：高さ約40cm）

カクチガ浦遺跡群

カクチガ浦遺跡群は、王塚台から松木南交差点一帯に延びる丘陵上に営まれた遺跡で、弥生時代から平安時代までの遺跡が発見されています。このうち弥生時代の遺跡は、平野を見下ろすことができる丘陵先端の高まりを中心に、住居が5軒、貯蔵穴が12基、土壇が34基確認されています。貯蔵穴は食べ物を保存するための貯蔵庫で、深さは3mほどあります。中からは貯蔵した食べ物を入れたと思われる土器が見つっています。



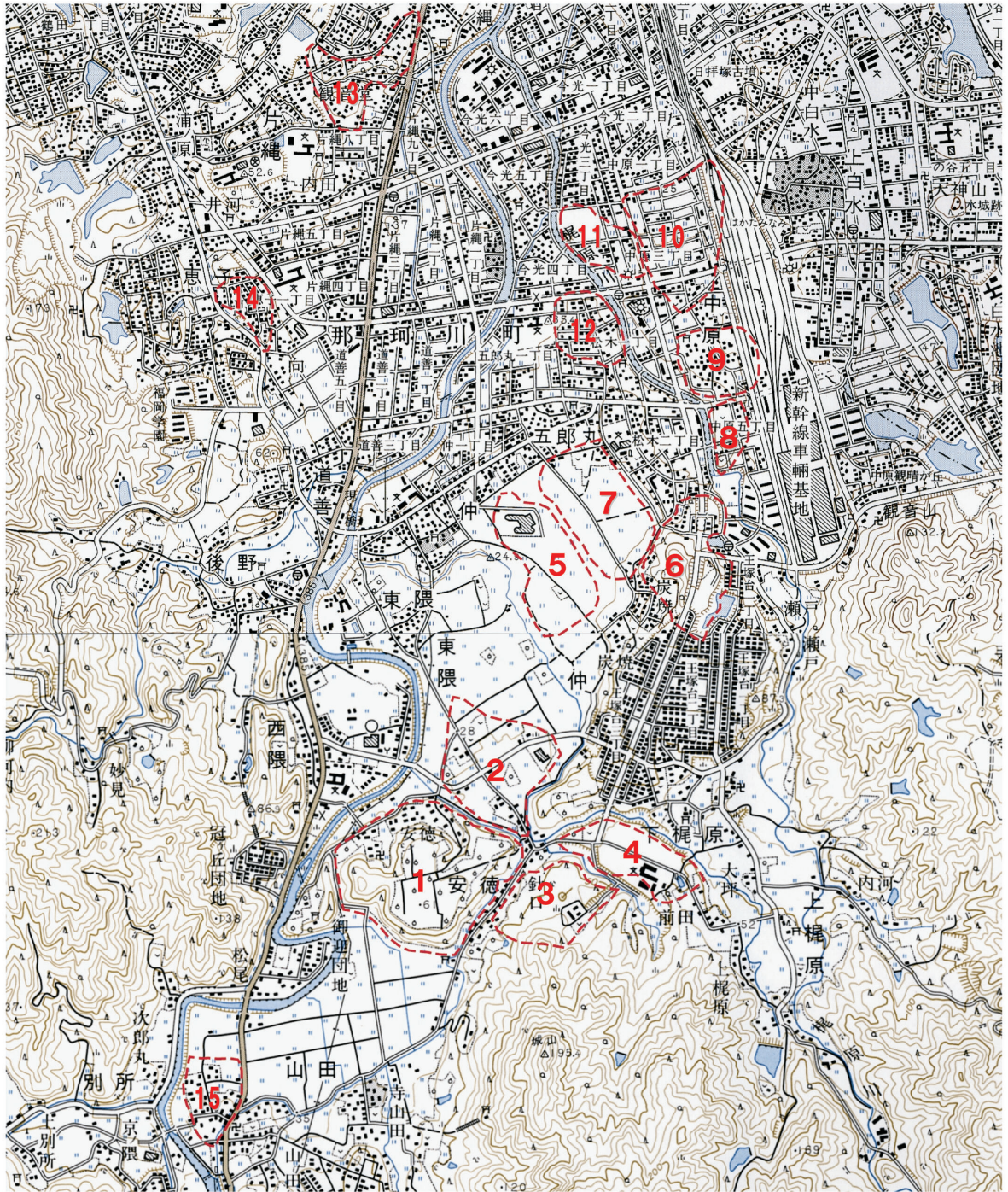
3号貯蔵穴の調査風景(左) 那珂川町で一番大きな貯蔵穴で、深さは3.5m以上もある。



貯蔵穴から出土した土器
壺(左3個)と鉢(手前)と無頸壺(右奥)(左:高さ約20cm)

おわりに

ここで紹介した遺跡以外にも那珂川町にはたくさんの弥生時代の遺跡があり、現在までに15遺跡の発掘調査を行っています。弥生時代の前期(初めごろ)の遺跡は、中原や松木で多く見つっています。村は、平野のなかで水害が少ない小高い場所に営まれており、ミリカローデン那珂川の周辺では水田の跡も見つっています。このなかで、カクチガ浦遺跡群だけは小高い丘の先端に営まれていますが、ここで発見された貯蔵穴は、ほかの遺跡で調査されたものと比べ密集しており、規模が大きく深くつくられていることから、当時の食糧倉庫としての役割を果たしていたのかもしれませんが。次に弥生時代の中期(中ごろ)になると、各地域で村々を支配する有力な集落が現れます。この有力集落の集まりが中国の史書にある『奴国』です。周辺では春日市の「須玖岡本遺跡群」や筑紫野市の「隈・西小田遺跡群」があり、那珂川町では「安徳台遺跡群」が全国的にも知られています。安徳台遺跡群では、この時期としては日本最大級の住居が見つかり、海外との交流を物語る中国でつくられた銅鏃や韓国で使われた土器も出土しています。また、お墓からは権力者でなければ持つことができない豪華な副葬品も数多く出土し、当時の那珂川町の繁栄ぶりを物語っています。さらに安徳台遺跡群は『奴国』といわれる地域で、唯一当時の姿を留める遺跡として、特に貴重な遺跡といえることができます。最後に弥生時代の後期(終りごろ)の遺跡はほとんど分かっていませんが、安徳台の下にある安徳原田遺跡群や恵子遺跡群からは、めったに出土することがない銅矛が見つっていることから、引き続きこの地に奴国の中核を担う村があったことを想像することができます。



これまで調査された那珂川町の主な弥生時代遺跡

那珂川町の文化財XVII
那珂川町の弥生時代遺跡

初版 2007 年／二版 2012 年

発行：那珂川町教育委員会

福岡県筑紫郡那珂川町西隈1丁目1番1号

印刷：有限会社 大吉

福岡県筑紫郡那珂川町今光2丁目113番地

- | | |
|-------------|----------------|
| 1. 安徳台遺跡群 | 10. 中原・ヒナタ遺跡群 |
| 2. 安徳原田遺跡群 | 11. 今光・宗石遺跡群 |
| 3. 龍頭遺跡群 | 12. 松木遺跡群 |
| 4. 平蔵遺跡群 | 13. 観音堂遺跡群 |
| 5. 仲遺跡群 | 14. 恵子遺跡群 |
| 6. カクチガ浦遺跡群 | 15. 山田西遺跡群 |
| 7. 前田遺跡群 | |
| 8. カイ子遺跡群 | ※太文字は冊子で紹介した遺跡 |
| 9. 中原塔ノ元遺跡群 | |